

2019年5月号 簿記論 つぶ問

4 問目

【問題】

次の間接法によるキャッシュ・フロー計算書（単位：千円）および資料をもとに、直接法によるキャッシュ・フロー計算書を作成しなさい。

キャッシュ・フロー計算書（間接法）

営業活動によるキャッシュ・フロー	
税金等調整前当期純利益	20,000
減価償却費	3,000
賞与引当金の増減額	1,000
売上債権の増減額	△2,000
たな卸資産の増減額	1,000
仕入債務の増減額	△2,000
前払費用の増減額	500
小計	<u>21,500</u>

資料

1. 当期の売上高は100,000千円である。また、当期の売上にかかる売掛金の貸倒れが1,000千円発生しており、貸倒損失（販売費及び一般管理費）として処理している。
2. 当期の売上原価は60,000千円である。また、売上原価には商品評価損500千円が含まれている。
3. 当期の販売費及び一般管理費は20,000千円である。なお、キャッシュ・フロー計算書の減価償却費はすべて販売費及び一般管理費として計上されている。

解答欄

キャッシュ・フロー計算書（直接法）

営業活動によるキャッシュ・フロー	
営業収入	
商品の仕入による支出	
その他の営業支出	
小計	<u> </u>

【解答】

キャッシュ・フロー計算書（直接法）

営業活動によるキャッシュ・フロー

営業収入	97,000
商品の仕入による支出	△61,000
その他の営業支出	△14,500
小計	21,500

【解説】

キャッシュ・フロー計算書の直接法と間接法の関係を確認する問題です。本誌では直接法と間接法の関係について図表での説明のみで数字による解説をしていなかったため、ピンとこなかった方はこの問題で確認してください。

営業収入（商品の売上による収入）

売上高を営業収入へ調整するには、まず売上債権の増減額 2,000 千円をマイナス調整します。そして当期売上にかかる貸倒損失 1,000 千円については、当期の売上高には含まれているが、当期に回収されておらず、かつ売掛金の増減額にも反映されていません。そのため、売上債権の増減額だけではなく、この貸倒損失も差し引くことにより、最終的に売上高から当期の収入を導くことができます。

商品の仕入による支出

間接法におけるキャッシュ・フロー計算書のたな卸資産の増減額に関して、3分法による売上原価の算定の仕訳からすると、たな卸資産が減少すれば売上原価が増えます。しかし、この売上原価の増加は支出を伴いません。そこで、間接法でのキャッシュ・フロー計算書ではたな卸資産の減少をプラス調整します。また、売上原価にたな卸資産の増減額を調整することで、仕入高へ戻すことができます。よって、売上原価 60,000 千円からたな卸資産の増減額 1,000 千円を差し引くことで仕入高が 59,000 千円と計算できます。さらに、仕入高 59,000 千円に仕入債務の増減額△2,000 千円を調整（2,000 千円を足す）ことで、仕入による支出 61,000 千円を計算できます。

なお、商品評価損は売上原価に含まれているため、キャッシュ・フロー計算書上は通常の商品販売によってたな卸資産が減少して売上原価になったものと変わりなく、調整は不要です。

その他の営業支出

販売費及び一般管理費 20,000 千円から非現金支出費用である減価償却費 3,000 千円と賞与引当金の増減額 1,000 千円を差し引きます。そして、前払費用の増減額が間接法で記載されていますが、もし営業外損益等にかかる前払費用ならば記載がないはずであるため、これも差し引きます。さらに、貸倒れ 1,000 千円も支出を伴わないため差し引きます。この結果、その他の営業支出は 14,500 千円となります。

これらを調整した結果、小計の金額は間接法の 21,500 千円と一致します。